

マリヴォー『腹心の母』における娘の問題

—恋愛と自己確立の喜劇—

廣岡 江梨子

はじめに—恋愛喜劇作家による親子喜劇

マリヴォーの喜劇『腹心の母 *La Mère confidente*』（1735年）は母娘を主題とするものであり、いわゆる恋愛心理喜劇として括られる典型的なマリヴォー劇とは異なるものとされてきた。十八世紀を通しての「家族の変容」という社会的背景に加え、それに関連する「女子教育論」の隆盛という思想的背景があることから¹⁾、特に「母による娘の教育」というテーマの下で論じられることが多かった²⁾。また、教育に問題を限定しない論考も多数あるが、いずれの場合も主に「母が娘をどのように扱うか」という母側の視点に着目していることで共通している³⁾。しかし、プロットの中心に娘の結婚問題がある以上、この作品も「恋を前にした若い男女の心理的葛藤」というマリヴォー劇特有のテーマと無関係とは言えないだろう。また、『腹心の母』が書かれたのは『改心した伊達男 *Le Petit-maitre corrigé*』や『うまくいった策略 *L'Heureux stratagème*』のすぐ後であり、作家の中で「恋愛を通じた道徳的成長」という主題が形成されていた時期であると言える⁴⁾。したがって、この作品において娘の恋愛に着目することは、マリヴォー劇の発展過程の中に作品を位置づける上でも有意義なことであろう。リュセット・デヴィーニュは、他のマリヴォー劇が「カップルの成立」までのためらいや葛藤を軸としているのに対して、『腹心の母』は「既に成立したカップル」が体制＝親の承認を得るまでの闘いを軸に据えているとした⁵⁾。しかし、この作品の恋人どうしが確固たる関係性をもつものでないことを重視するならば、そのような「子ども＝カップルと親の対立」という解釈だけでは十分でないと考えられる。本論考では、母ではなく娘側の視点を中心に作品を読みなおすことで、親子間の対立だけに回収されない人間関係の問題を見出す。それにより、逆にマリヴォーがこの時期に親を前面に押し出した喜劇を書いたことの意味も明らかにしていきたい。

1. 母娘関係の虚構性

a) 隠された緊張関係

まず『腹心の母』のあらすじを記しておく。裕福なブルジョワの娘アンジェリックにはドラントという恋人がいるが、彼女の母親アルガント夫人は他の男性を娘の結婚相手にと決めており、ドラントとは別れるように娘を諭す。焦ったドラントは娘の誘拐を計画し、それを知った母は伯母のふりをして彼を説得する。最終的にドラントはアンジェリックのためを思って身を退くことにするが、母は彼の誠意に感心し、娘と彼との結婚を許可する。

本節では、この作品の母娘関係を娘の物語の初期条件として考察する。概してマリヴォー喜劇に登場する「親」は、モリエール喜劇に登場するような強権的な親とは異なり、子どもへの理解を示し、子どもを導く存在である。『腹心の母』のアルガント夫人もそうした「優しい親」の一面を持っているが、一様に優しい親というわけではない。この物語のはじめに提示される母娘の関係性は、緊張を孕んだ愛情関係と呼べるものである。

アルガント夫人：あなたはもうじき彼に会うのよ、ここに来るはずなの。それで気に入らなかつたら、無理に結婚しなくてもいいのよ。わかるでしょう、私たちは人生を共にしているのだから。

アンジェリック：まあ、お母さんが私に何かを無理強いなさるなんて、そんなことは心配していません。

アルガント夫人：私があなたのことを愛してるって、ちゃんとわかってる？

アンジェリック：それを証明してくださらない日は一日もないもの。

アルガント夫人：あなたも私のことを同じくらい愛してる？

アンジェリック：そのことを疑っていらっしやらないと思っていますわ⁶⁾。

(第1幕第8場)

母は娘にある男性を結婚相手として勧めているが、あくまでその結婚は強制ではないと言う。母は自分と娘が「人生を共にしている *vivre ensemble*」と言い、自分たちの間に意見の齟齬がないことを強調する。娘はそれに賛同するが、「無理強い *violence*」という不穏な言葉を使っているところに、母との間に緊張関係があると意識していることが表れている。アルガント夫人は続いて、「愛する *aimer*」という言葉で畳み掛け、アンジェリックに圧力をかけているようである。自分が相手を愛しているという理由で、相手にも自分を愛することを求めているのである。それに対してアンジェリックは肯定的に答えているものの、「愛する」という言葉を直接言っていないことなどから、積極的な愛情表現を避けている様子が見てとれる。

このように一見仲の良い母娘のようでありながら緊張関係が存在していることは、

これより前の場面のアンジェリックと侍女リゼットの対話で既に示されている。そこではアンジェリックは、自分とドラントとの結婚にあたって唯一の障害になるのが母親であると言う。

アンジェリック：もはや心配なのはお母さんのことだけよ。お母さんは私を溺愛していて、私にはその愛情しか感じさせたことがないし、私が望むものだけを望んでいるわ。

リゼット：ええ、それはお嬢様が、お母様のお気に召すもの以外は決してお望みにならないということですよ。

アンジェリック：でも、お母さんがこんなにうまくやって、お母さんの気に入るものが私も気に入るということは、それは私が常に自分の意志を実行しているのと同じことですよ。

リゼット：もう震えていらっしゃるんですか？

アンジェリック：いいえ、あなたが励ましてくれるもの。でも、私の財産なんて、つくづく邪魔だわ。ああ、こんなに裕福でいるなんて嫌なことだわ。

(第1幕第2場)

アンジェリックと母との間には、これまで衝突が起きたことがなかった。それは彼女も理解しているように、これまで母娘間に意見の対立軸となるものがなかったからである。両者の望むものや気に入るものが一致する限り、両者の違いすら見えてこない状態、すなわち互いに同化している状態にある。しかし、これは逆に、何か少しでも食い違いがあれば衝突する可能性が常にあるということを示す。アンジェリックが怯えているのは、その潜在する危機に対してである。そして、彼女がここで財産を煩わしいものと捉えているのは、それがアンジェリックとドラントの結婚に反対が起こる理由になりうるからである。ドラントにはアンジェリックと釣り合うような財産がないので、それを理由に母が彼との結婚を許さないことが予測される。ここでは、財産という外的要因が、恋人との結婚を阻むだけでなく、母と娘のユートピア的な関係性を脅かすものとして意識されているのである。このように何も入り込む隙がないほどに密着した、張りつめた母娘関係は、他のマリヴォー劇にはないものであり、そこに特別な意図が込められていると考えられる。

b) 関係性の捉え方をめぐる対立

恋愛喜劇の初期条件として、親が子の結婚相手を決めるが強制はしないという状況そのものは、他のマリヴォー劇にもよく見られる。たとえば『愛と偶然の戯れ *Le Jeu de l'amour et du hasard*』(1730年、以下『戯れ』)の場合、その状況は結婚に対する主人公の態度を能動的にし、結婚相手について知ろうとする行動を促す重要なものであ

る。ここでは『戯れ』の親子関係と比較することで、『腹心の母』の親子関係の特徴を考察する。『戯れ』のシルヴィアの父オルゴンは前述の「優しい親」の典型であり、娘への愛情を示し、娘の意志を尊重する。

オルゴン：[…] 娘よ、私がお前のことをどれだけ愛しているかわかるだろう。ドラントはお前と結婚するためにやってくる。この前私が地方を旅したときに、ドラントの父親と、この結婚を取り決めた。彼は私の古くからの親友だ。だがこの結婚は、お前たち二人がお互いを気に入ればの話だ。この点についてはお前たちが思うことを遠慮せずに言ってよいぞ。私には一切気を遣うな。もしドラントのことが気に入らなければ、そう言えばいいだけだ。そうすれば彼は立ち去るのだ⁸⁾。[…]

(『戯れ』第1幕第2場)

オルゴンはアルガント夫人と同様に、結婚相手が気に入らなければ断ってもよいと言って、結婚に関する娘の自由を認めている。しかし、彼がアルガント夫人と異なるのは、娘に対して親である自分への愛情を強いていないというところである。自分への「心遣い *complaisance*」が不要であると言うことで、娘に干渉しないことを明言している。その点、アルガント夫人は無理強いしないと言いながらも自分への愛情を求めることで、言外の圧力をかけていたと言える。このようにアルガント夫人には、愛情によって逆に娘の自由を奪うという特性がある。

『戯れ』において、優しい親オルゴンに対して娘シルヴィアの取る態度は従順なものである。

シルヴィア：お父さん、ご好意に感謝します。気遣いをするなどおっしゃるので、それに従います。

オルゴン：ああ、そう命ずる⁹⁾。

(『戯れ』第1幕第2場)

シルヴィアは「気遣いを禁止する *défendre toute complaisance*」という父の言葉を命令と捉え、自分はそれに「従う *obéir*」と言う。父はそこで敢えて「命ずる *ordonner*」という言葉を使うことで、親の権威による支配関係を認める。これにより、親子の立場の違いを意識した上での打ち解けたやり取りとなっている。『腹心の母』の娘も同じように命令と服従の語彙を持ち出すが、それに対する母の反応が『戯れ』の父とは異なる。

アルガント夫人：でも、あなたの私への愛をもっと確信するために、一つお願い

を聞いてほしいの。

アンジェリック：まあ、お願いだなんて。その言葉は私には合わないわ。命令してください。従いますから。

アルガント夫人：あら、そんなふうにとるということは、思ったほど私を愛してくれていないみたいね。あなたに命令することなんて何もないわよ。私はあなたの友だちで、あなたは私の友だちなんだから。そうではないふうに私に接するなら、もう何も言うことはないわ¹⁰⁾。

(第1幕第8場)

アンジェリックにとっては、娘が母の「願いを聞く *accorder une grâce*」というのは不適切な言い方であり、彼女はそれを「命ずる *ordonner*／従う *obéir*」という表現で言い換える。しかし、今度は母親が命令という言い方を否定し、自分たちは「友だち *amie*」だと言いだす。つまり、アンジェリックがあくまでも母娘間にある支配関係を浮き彫りにしようとするのに対し、アルガント夫人はそれを隠蔽して、打ち解けた関係を装おうとしているのである。以上の『戯れ』との比較から明らかのように、『腹心の母』の母娘においては、友好的関係の背後に「関係性の捉え方をめぐる対立関係」がある。この対立は、母が友人関係という「虚構」をつくるのに対し、娘が親子の支配関係という「現実」を顕在化させるというように、虚構と現実を軸とするものである。

c) 虚構と現実の往還

アルガント夫人が自分と娘のことを「友だち」だと言うのは、実は娘の秘密を聞き出すために、娘の話しやすい状況をつくるという戦略に沿ってのことである。

アルガント夫人：[…] 隠さずに言いなさい。私をあなたの腹心の友になさい。

アンジェリック：お母さんが、娘の腹心の友ですって？

アルガント夫人：あら、娘だなんて、誰がそんなこと言うの。もう一度言うけれど、あなたの腹心の友になりたがっているのは、あなたのお母さんじゃなくて、友だちよ。

アンジェリック、笑いながら：わかりました、でも、私のお友だちはお母さんにすべて伝えてしまうでしょう。一方はもう一方と切り離せないでしょう¹¹⁾。

(第1幕第8場)

母は自らの立場を *confidente* (腹心の友、打ち明け話を聞く人) と設定することによって、娘から本当のこと—母が密かにその存在を把握している恋人について—を話すように仕向けている¹²⁾。しかし、娘はその戦略的虚構をすぐには受け入れられず、母

が娘の腹心の友になるということの不自然さを指摘する。すると母は、自分は母ではなく友だちだから腹心の友になれるのだと、やはり虚構の設定によって反論する。続いて、今度は娘がその虚構性を逆手に取り、「私のお友だちからお母さんに話が伝わるだろうから」と言って、打ち明け話をするのを避ける。このように、母と娘は虚構の関係性と現実の関係性の間を往還する。そして、娘が一旦虚構を受け入れたときに新たな局面に移る。アンジェリックは母の言葉に乗せられて、そのはずみに恋人の存在を告白してしまうのである。

アンジェリック：[…] 私には好きな人がいるんですもの。

アルガント夫人、真剣な様子で：好きな人がいるの？

アンジェリック、笑いながら：ほら、お母さんはここにいらっしやらないはずでしょう。なのにお母さんがお答えになっています。でも、安心してください、冗談ですから。

アルガント夫人：いいえ、冗談ではないわ。本当のことを言ってるんでしょう。私は何も驚かないわ。私がまじめに答えたのは、あなたがまじめに話したからに過ぎないのよ。だから心配いらないわ。で、好きな人がいると言うのね。

アンジェリック：自分の言ったことを取り消したくなってきましたわ¹³⁾。

(第1幕第8場)

娘が打ち明けると、母は急に真剣な口調になり、それまでの表面的には打ち解けていた雰囲気を変える。そこで娘は、再び設定の虚構性に言及するとともに、自分の告白したことを「冗談 badiner」、つまり虚構だったことにしようとする。しかし、母はもはや「本気 sérieux」から「冗談」へ戻ることを許さず、現実をもって娘を問い詰める。ここで虚構と現実の攻防が入れ替わったことになる。友だち関係という虚構を使って娘の告白を引き出した母は、その告白内容を今度は現実として議論するために、友だちの設定から母に戻る。娘は母のその自在な変わり身に翻弄された結果、事実をごまかさずに話さなければならなくなったのである。

この場面を母娘間の戦略的対話という次元で見ると、これは母の完全な勝利と言えよう。しかし、別の見方をして、場面を人物と人物の攻防ではなく、人物と言葉との関係性の変化として捉えると、この場面は虚構と現実の間の、冗談と本気の間、そして策略と感情の間の往還と見ることができる。母娘関係というものが、他の人間関係と同様、確固たる関係性としてあるものではなく、虚構によって成り立っているにすぎないということ、作者は示しているのではないだろうか。ここに、従来の喜劇とは異なる親子像を造形したことの意図が見える。それでは、このような母娘関係の虚構性は娘の恋愛にはどのように影響するだろうか。

2. 恋愛をめぐる虚構と現実

a) 出会いに対する評価

本節では、娘の恋愛が母娘によってどのように扱われるかを考察する。まず、母にとって、娘の恋にはどのような難点があるのだろうか。母に反対される理由としてアンジェリックがはじめに心配していたのは、彼に財産がないという経済的な問題であった。しかし、実際アルガント夫人は財産のことは話題にせず、娘と恋人との「出会い方」を問題にする。

アルガント夫人、笑いながら：[…] その話をしてみなさい。まじめな話というより愉快的話のようね。田園での出来事、出会いにすぎないのでしょう。

アンジェリック：その通りですわ。

アルガント夫人：おおよそ気取った若者があなたにお辞儀をして、巧みにおしゃべりに誘ったんでしょう。

アンジェリック：まさにそうですわ。

アルガント夫人：その人の厚かましさはあきれたものね。その人から見ればあなたは近づきたい人であるはずなのに。ちょっとなれなれしいのじゃないかしら？¹⁴⁾

(第1幕第8場)

娘とその恋人との出会いについて、母は自身の想像によって話している。「愉快的 *plaisant*」という形容は「まじめな *sérieux*」の反対として用いられており、また「出来事 *aventure*」という言葉には不埒なことというニュアンスが含まれる。母は娘の恋愛をそのようなものと捉えているのである。この評価は娘の恋人の人格に及び、その想像上の若者について「気取った *galant*」、「巧みに *adroitement*」、「厚かましさ *hardiesse*」、「なれなれしくする *manquer de respect*」といった表現が用いられ、侮蔑の調子が次第に強められていく。母がここで批判しているのは、娘に軽々しく話しかける若者の不躰な態度であるが、これはマリヴォーの他の作品にも繰り返して出てくる「当世流行の恋愛」に重なるものである。当時の風俗として、いわゆる恋愛の段階や作法を省略する傾向、「手早く済ませる *expéditif*」恋愛の流行があった¹⁵⁾。アルガント夫人においてもそうした先入観、つまり若者の性急な恋愛というイメージが念頭にあると言える。母のこのような批判に対して、娘は次のように反論する。

アンジェリック：いいえ、すべては偶然のせいなんです。リゼットがきっかけなんです、と言っても悪気はなかったのですが。リゼットが持っていた本を落として、彼がそれを拾って、それで言葉を交わしました。ごく自然なことです¹⁶⁾。

(第1幕第8場)

娘は出会いが「偶然 hasard」によるもので「悪気はない innocemment」こと、その状況がまったく「自然 naturel」であったことを強調し、自分たちには非難される理由がないということを主張している。ここで、侍女の落とした本が出会いのきっかけになったと言っているが、その時のことは侍女が既に口にしている。

リゼット：お嬢様、あの方と結婚なさるべきです。天があなた方を運命で結びつけている、それは明らかです。あの出来事を思い出してごらん下さい。私たちは二人で林の小道を歩いていました。他にもたくさん散歩する場所があるのに、そうではなかったのです。初対面のあのお方は、他ではなくあの場所にいらっしやったのです。それは私たちに会わなければならなかったからです。あなたはそこで何をなさっていましたか？読書です。そしてあの方は？こちらも読書です。これ以上ははっきりしたことがありますか？¹⁷⁾

(第1幕第2場)

アルガント夫人が愉快なもの形容した「出来事 aventure」を、リゼットは「天 ciel」、「運命づける destiner」といった言葉で厳かなもののように語っている。そしてリゼットによると、二人が同じ場所で本を読んでいたという事実が、その運命を「明らか visible」で「はっきりした marqué」ものにしている。こうした言い回しは侍女らしい誇張でもあるが、そこには出会いの場面に対する彼女の夢想的な憧憬も込められている。

以上のように、出会いの場面の捉え方がアルガント夫人、アンジェリック、リゼットにおいて三者三様に異なる。この出会いを母はふとどきなものとし、娘は自然なものとし、侍女は運命的なものとしているのである。こうした捉え方の違いは、各々における恋愛との距離感の違いと言えるだろう。

b) 小説的恋愛

恋愛の捉え方に関して、前述の出会いのきっかけが「読書」であったことに象徴的な意味を見ることができる。マリヴォーの作品で言えば初期の小説『ファルサモン *Pharsamon*』や『足どめされた馬車 *La Voiture embourbée*』の登場人物をはじめとして、小説の読書に熱中するあまり、非現実的で滑稽な振る舞いをしてしまう人物が描かれることが、少なからずあった。アンジェリックが世間知らずで現実が見えていないということを、出会いの場面の読書が暗示していると言えるだろう。アルガント夫人も娘が恋に関して現実を見誤っていると言う。

アルガント夫人、笑いながら：ねえ、その人のことを好きだと思うなんて、どうかしているわよ。リゼットがそう思わせたのよ。あなたはそんなことにはもったいないわ。すぐに自分でも笑うことになるわよ。

アンジェリック：いいえ、そんなことはありません。本当に、そんなことになるとは思えません。

アルガント夫人：ばかばかしいこと。そこにはあなたの心をつかんでいる小説の雰囲気があるということよ。

アンジェリック：私、そういうものは断じて読みません。それに、私たちの間の出来事は、この上なく素朴なものなんです¹⁸⁾。

(第1幕第8場)

母は、娘がその若者を愛しているということについて、娘が「愚かにもそう思って folle d' imaginer」いるだけ、あるいは侍女がそう「思わせて fait accroire」いるだけだと断じている。先に挙げたリゼットの夢見がちな発言があるだけに、これはある程度状況を言い当てていることを否定できない。さらに、母は娘の恋を「ばかばかしいこと bagatelle」とした上で、それを「小説の雰囲気 air de roman」と表現している。当時、小説は美学的観点と倫理的観点の両方から貶められていた。小説のもつ非現実性と不道徳性という相関する二つの性質が批判されていたのである。そうした理由から、殊に若い娘が小説を読むことに関しては、墮落をまねく危険なことというイメージがつきまとっていた。アルガント夫人は、アンジェリックが小説のような空想に現をぬかしていることと、それによって道を踏みはずす危険をおかしていることを示唆しているのである。一方、アンジェリックはそうした母の捉え方を否定する。小説をまったく読まないと断言しているのは、小説のような恋に憧れたり現実を見失ったりしていないと主張しているのと同じことである。また、前の引用箇所での出会いについて「自然なもの」と表現したのに続き、ここでは「素朴な simple」ものとしている。こうした言い方は、恋愛を小説的な虚構ではなくありのままの現実として捉えたいという娘の意志を表していると言える。

以上に見たように、娘の恋人を認めるか否かという母娘間の対立は、娘の恋が現実的か小説的かという捉え方の対立と重なっている。しかし、二人の間に根本的な考え方の相違があるというわけではない。つまり、空想ではなく現実を見るべきであるということ、恋愛にも現実性を求めるべきであるということにおいては両者の意見が一致しているのである。二人は人間関係の虚構性の下で、現実をどのように捉えるかを模索しているようである。

c) 虚構的人間関係の創出

アルガント夫人は娘の恋愛を小説的なものとして非難したが、夫人自身も物事を客

観的に見られているわけではない。母は、娘が若者と軽率に交際することの危険性を示しつつ、娘のおかれている状況を次のように表現する。

アルガント夫人：ああ、私の娘、自分のしたことをご覧なさい。母を欺いて、軽率な若者と隠れて会い、彼の不作法や虚栄心の被害に遭う危険を冒し、彼の言うことなら何にでも耳を傾け、そして何度も秘密で会うというふしだらなことに身を任せる、そんなことができるなんて思っていたのかしら。そうした密会をお膳立てするのはあの心ない、情けない侍女ね。彼女はそれがどんな結果になろうと、自分の利益さえあれば気にしないのよ、確かに利益はあるのでしょうか。ひと月前には、あなたがここまで道を踏みはずすなんて、誰にわかったかしら。あなた自身にもわからなかったでしょう。

アンジェリック、悲しそうに：私は間違いを犯すかもしれないというのですね、そんなことは考えもしませんでしたわ¹⁹⁾。

(第1幕第8場)

夫人は、虚栄心の強い若者と利己的な侍女、そして彼らにそそのかされて道を踏みはずす若い娘という社会構造を、アンジェリックたちに当てはめている。また、「あなたのしたことをご覧なさい *vois ce que tu as fait*」と言っているように、それが娘自身も気づいていなかった現実であるとしている。当時の若い娘を取り巻く社会的事実として、確かにそのような人間関係はあり得ただろう。しかし、それはあくまで社会として蓋然性があるということにすぎず、個別の場合をそれで説明できるとは限らないはずである。母は一見したところ恋愛の現実の部分を見させているようであるが、実際はこれも一つの虚構の人間関係を見せているにすぎないと言える。

アルガント夫人：ねえ、あなたにそういうことを〔若者との交際で評判を落とす危険について〕考えさせるのは誰？それは、あなたを裏切るために雇われているような召使でもないし、あなたを誘惑することだけを喜びとするような恋人でもないわ。あなたは敵にのみ意見を求めている。あなたの心さえも彼らの味方よ。あなたの助けになるのはあなたの美德のみだけど、その美德は満足していないはず。そしてもう一つあなたの助けになるのは私のような真の友なのに、その友をあなたは信じていない。なんという危険を冒していることかしら²⁰⁾。

(第1幕第8場)

夫人は先に提示した虚構の人間関係を敵と味方の関係に落とし込んでいる。ここでは、娘にとって若者と侍女が敵であるばかりでなく、娘自身の「心 *cœur*」さえが敵であるとされる。娘の一部である「心」と「美德 *vertu*」が擬人化され、娘の存在自体が関

係性のなかに解消されてしまっているかのようである。そして、その関係性の中に母は再び「友だち」という虚構となって現れている。

アンジェリック：ああ、お母さん、私のお友だち、あなたのおっしゃる通りですわ。あなたのおかげで目が開かれ、私は恥ずかしさでいっぱいです。リゼットは私をだましたのだし、私はあの青年とは終わりにします。あなたのご助言には感謝してもしきれませんわ²¹⁾。

(第1幕第8場)

アンジェリックがここで「お母さん」と「お友だち」という二つの呼び方を同時に用いていることは、彼女の中で現実の関係性と虚構の関係性ともはや混同されていることを示していると言える。ドラントとリゼットを敵とする人間関係は、このように虚構と現実の往還を繰り返す母娘関係によって支えられるものである。娘はここで、虚構への距離の取り方を見失っているのである。

娘の恋愛の捉え方は虚構的＝小説的なものから現実的なものの方へ移行するかに見えたが、それはむしろ娘の描く虚構から母の描く虚構への移行であった。こうした複数の虚構とどのように切り結んでいくかが、娘の物語における問題となるのである。

3. 虚構の裂け目における自己の発見

a) 偏見と自己意識

前節までは母との対話における展開を見てきたが、恋人と対峙したときには娘の心理はどのように変化するだろうか。アンジェリックは先の母との対話によって、恋人との間に何のアクションもないままに態度を180度転換させる。ドラントを不誠実な若者として扱い、事情を知らない彼や侍女を驚かせるのである。

アンジェリック：もしドラントさんが、さっき言ったように、ほぼすべての若者の例に倣って、私のせいではないあの出来事〔二人で会話をしたこと〕を自慢するような人だったなら、私はどうなるの？

[…]

アンジェリック：それに、もしあなたが、自分の利益になれば主人にとって悪いことでも平気でしてしまうような、あの欲得ずくの娘たちの仲間だったなら、私はなんとという危険にさらされることになるの？²²⁾

(第2幕第3場)

ここでは彼女は母の言ったことをなぞって、強い口調で二人を非難している。母の描

いた虚構を現実的なものと捉えているのである。若者と侍女を個人でなくカテゴリーとして捉えており、彼らを偏見によってしか見ていないことがわかる。このような偏見的な態度、それも結果的に母の言う通りに振る舞うことは、人との関わり方として主体性に欠けるものである。しかし、ドラントを追い払ってしまった後で、彼の切々たる態度を思っただけで反省する様子が見られる。

アンジェリック、しばし黙った後、傍白：急ぎすぎてしまったわ。お母さんは経験のすべてをもって判断を誤ってしまった。ドラントさんは誠実な人だわ²³⁾。

(第2幕第4場)

アンジェリックは、拒絶されて苦しむ生身のドラントを見たことで、ようやく母の描いていた若者像に疑いを抱くこととなる。自分の主観によって、彼が実際は誠実な人であると判断しなおすのである。人との関わりにおける「経験 *expérience*」の有無が母と娘の判断の違いを生じさせるものであるが、その母の経験よりも自分自身の実感を信じるということである。このように思いなおしたアンジェリックはドラントを呼び戻し、彼と和解する。

ドラント：では、あなたを愛する私の心をもう疑わないでください。

アンジェリック：ええ、ドラントさん、約束します。もう終わりました。二人とも、許してくださいね、私の年頃の臆病で貞潔な娘が陥る混乱を。人生にはたくさんさんの畏があつて、私はあまりに経験が少ないし、人が私をだまそうとすれば難しいことではないでしょう。私には慎重さと純真さしかなくて、それしかなければ恐れをいただくこともありうるでしょう²⁴⁾。[…]

(第2幕第6場)

アンジェリックは自分が偏見に陥ってしまった理由として、「経験があまりに少ない *j' ai si peu d' expérience*」ことや「慎重さと純真さしかない *je n' ai que ma sagesse et mon innocence*」ことを挙げており、自身の「不足」の部分への意識を示している。このように偏見を偏見として認識すること、自分の判断の誤りを認めること、そして母と自分の違いを意識することを通して、自己に対する意識が芽生えはじめていると言える。ここにおいては、先に母から「小説的」だと言われたようなフィルターのかかった他者認識とは違う、他者との直接的な関わりに基づく他者認識が生じたことで、自己認識が立ち上がろうとしているのである。

b) 二つの虚構の間

他者と自己を明確に意識することは、人間関係の虚構性そのものを認識することで

もある。アンジェリックは、自らの他者認識も母の他者認識と同様に虚構であると理解している。それは、彼女が母に対して恋人を擁護するときの言葉にも表れている。

アンジェリック： […] あなた自身が彼を軽蔑なさいます。彼は途方に暮れています。あなたは彼に対して既に偏見がありすぎましたが、彼はそんなに軽蔑すべき人ではないのです。彼を擁護するのをお許しください。私自身も偏見を持っているのかもしれませんが。 […] 彼のことをふらふらした若者で、愛よりも虚栄心が強くて、ただ私を誘惑しようとしている人だと、あなたはお思いですが、実際はそうではないのです²⁵⁾。 […]

(第2幕第12場)

アンジェリックは母が「偏見をもっている *prévenu*」ことを指摘しながら、自分の中にも偏見があることを認める。つまり、自身の思い描く誠実なドラントと、母の思い描く不埒な若者との、どちらが本当であるかということには確証がないことになる。しかし、いずれも広い意味での虚構にすぎないということを確認した上で、そのどちらを信じるかを選択しようとしているのである。したがって、ここには単なる親と子の対立関係だけでなく、虚構と現実をめぐる対峙が見られる。娘は単純に恋人を信じて母に反抗しているのではなく、他者認識の虚構性を主張しているのもあって、自分の信じる恋人像が本当に正しいものなのかということについても留保しているのである。このように、二つの虚構の間に立つことによって娘の自己意識も明確になりつつあると言える。

c) 自己喪失による自己確立

喜劇のプロットとして言えば、物語が進むにつれて、娘が母と恋人の間で板挟みになった状況が強まっていく。しかし、ここまでの考察を踏まえて「母と娘」という枠組みを取り払ってみれば、アンジェリックは自己と他者の間、そして虚構と現実の間で板挟みになっていると捉えることができる。母に対する次の台詞にもそれが表れている。

アンジェリック： 言いますけど、あなたにすべて打ち明けたことを後悔しています。私の愛は大事なもののなのに、その愛に身を任せる自由を、私は自分から奪ってしまいました。その自由を惜しんでいると言ってもいいぐらいです。目を開かされたことが残念でさえあります。自分を恐れさせる一切のものが私には見えていませんでした。そして、見えるようになった今のほうが辛いです²⁶⁾。

(第2幕第12場)

恋人のことを母に打ち明けることは、恋人を裏切って母の側につくことであり、娘はそのことを後悔していると言っている。しかし、その後悔にはより深い意味もあるだろう。母の描く虚構の若者像ないし人間関係に対して「目を開かされ être éclairé」、そのために苦しんでいるというのだから、彼女は虚構の捉え方に逡巡させられる自己の現状を嘆いているのである。つまり、単純に恋人と母のどちらかを信じるということができない状況を辛く思っている。そのように見れば、「身を任せる自由を自分から奪う m' ôter la liberté d' y céder」という表現も興味深い。「身を任せる」ということ自体が自由を失うことであるが、そうすることの自由を自ら奪ってしまったというのであるから、主体としての自己と客体としての自己が錯綜しているようである。彼女が「自分とは何か」という根本的な問題にまで行きあたっていることがここに表れている。これは自己と他者、現実と虚構が入り乱れ、切り結んだ末の自己意識の混乱であるとも言えるだろう。

物語がクライマックスに近づくと、アンジェリックの自我の混乱状態も極限に近づく。彼女を誘拐しようとするドラントと、伯母に化けて彼を説得しようとするアルガント夫人の間で、もはや身動きがとれなくなったとき、彼女は次のような不可解な台詞をもらすのである。

アンジェリック：私から離れないでください、助けてください、私はもう自分のことがわかりません。

アルガント夫人：あなたを助けるって、誰から？

アンジェリック：ああ、それは私から、ドラントから、そして、たぶん私たちを引き離すだろうあなたからです²⁷⁾。[…]

(第3幕第8場)

恋人や母だけでなく自分さえもが自分の敵となり、なおかつ敵であるはずの母に自分という敵から救ってほしいと頼んでいるのであるから、自己と他者が錯綜していることは言うまでもない。ここでは、すべてが相対的な虚構である人間関係の中で、彼女自身がどの虚構を選ぶこともできなくなり、虚構の裂け目の中で自己を喪失してしまっていると言える。「もはや自分のことがわからない je ne me reconnais plus」というのは、何を信じればよいのかわからなくなった挙句、自分自身がどうしたいのかも見失ったことを示している。しかし、この完全な自己喪失の状態を認識することは、彼女にとって逆説的に自己を発見することでもある。虚構と虚構の間、他者と他者の間に解消される自己を見出すことが、虚構でない真の自己を確立することなのである。

むすび—娘の自己確立と母の機能

従来の解釈では母の策略の喜劇とされてきた『腹心の母』を、本論考では娘の自己確立の喜劇として読むことができた。この作品では、母娘の関係も恋人どうしの関係も虚構性の中に解消され得るものとして提示され、その中で娘がどのようにして真の自己にたどり着くかが描かれていた。はじめの虚構的な母娘関係においては、アンジェリックは母と密接しすぎているために他者意識も自己意識も持ち得なかった。そして恋人との関係性も、はじめは小説か現実かという二項対立によってしか捉えられず、そのために彼女は極端な偏見に陥ってしまった。しかし、恋人との一時的な破局と和解を通して、人間関係の虚構性そのものに気づき、そこから他者意識とともに自己意識が芽生えた。虚構と現実の板挟みで自己を見失うが、それによって逆説的に自己を発見するに至った。

マリヴォー劇特有のテーマである「恋を前にした葛藤」は、この作品においてはアンジェリックの自己確立までの道のりとして表れている。他の作品では、「恋の発露」のプロットに分類される『恋の不意打ち *La Surprise de l'amour*』や『愛と偶然の戯れ *Le Jeu de l'amour et du hasard*』においても、「恋と道徳的成長」のプロットに分類される『改心した伊達男 *Le Petit-maître corrigé*』や『うまくいった策略 *L'Heureux stratagème*』においても、主人公の恋の障害となるものは、主人公自身の過剰な自尊心であった。それに対して『腹心の母』では、アンジェリックの恋を阻むのは彼女の自己意識の欠如であったと言える。そして、そのような初期条件から出発して主人公を恋の成就へと導くためには、他のマリヴォー劇では従者による策略や恋人による策略、変装といった手段が用いられた。『腹心の母』においてはアンジェリックの自己確立のプロセスに策略は関係がなく、それは他者との対話を通しての彼女自身の意識の変化によってなされた。このようにアクションではなく「捉え方」によって物語が展開するところが、この作品の特徴なのである。

マリヴォー劇の図式からすれば娘を前面に押し出した喜劇になるはずのところ、母の存在感の方が大きくなっている理由は、一つには、前述のように娘の物語がアクションに欠けるということであろう。そしてもう一つの理由として考えられるのは、アルガント夫人が二重の意味で娘の恋を妨げる機能を持っているということである。一方では強い母として、娘に恋人との交際を禁じる。そして他方では友好的な母として、娘の自己意識が発達するのを妨げる。このように母は娘に対抗する両義的機能を担い、いわば表と裏から喜劇を支配しているのである。アルガント夫人が心理的一貫性に欠ける人物であるということがこれまでに指摘されてきたが、その理由としても、こうした母の機能の二重性を挙げることができるのではないだろうか。

注

1) 十七世紀後半にフェヌロンの『女子教育論』とランベール夫人の『娘に与える母の意見』、十八世紀後半にルソー『エミール』における女子教育論とラクロのエッ

セー『女子教育論』がある。

2) Lucette Desvignes, « Dancourt, Marivaux et l'éducation des filles », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1963, 3, p. 394-414 ; Annie Rivara, « La Mère confidente de Marivaux, ou la surprise de la tendresse, une expérimentation morale et dramaturgique », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1993, 1, p. 73-93.

3) たとえばロビン・ホーウェルズは、「父親問題」を論じたポール・ペルクマンの著作 (*Le Sacré du père : fictions des Lumières et historicité d'Eipe 1699-1775*, Amsterdam, Rodopi, 1983) を踏まえ、マリヴォーにおける母親の問題を論じた (Robin Howells, « 'La Force maternelle' : L'École des mères et La Mère confidente », *Revue Marivaux*, 1992, n° 3, p. 114-20)。また、テーマの社会学的考察にとどまらず、言語学的モデルからアプローチしたものがあるが、そこでも論点は娘に対する母の戦略に置かれている (Olivier Fournout, « Le négociateur : une 'mère confidente' ? », *Communication et langages*, n°136, 2ème trimestre 2003, « Dossier : Batailles du marché et pouvoirs du signe », p. 72-91)。

4) このテーマについては拙論の中で考察した (廣岡江梨子「マリヴォー『改心した伊達男』におけるジャンルの混交」、『仏文研究』47号、京都大学仏文研究会、2016年、p. 91-110、「マリヴォー『うまくいった策略』における代替親子関係—道徳的恋愛喜劇の親子と主従」、同48号、2017年、p. 125-145)。

5) Lucette Desvignes, « Marivaux et l'Adolescence », *Revue Marivaux*, 1992, n° 3, p. 20-40.

6) Madame Argante : Vous le verrez bientôt, il doit venir ici, et s'il ne vous accorde pas, vous ne l'épouserez pas malgré vous, ma chère enfant, vous savez bien comme nous vivons ensemble.

Angélique : Ah, ma mère, je ne crains point de violence de votre part, ce n'est pas là ce qui m'inquiète.

Madame Argante : Es-tu bien persuadée que je t'aime ?

Angélique : Il n'y a point de jour qui ne m'en donne des preuves.

Madame Argante : Et toi ma fille m'aimes-tu autant ?

Angélique : Je me flatte que vous n'en doutez pas assurément.

(*Théâtre complet*, éd. Henri Coulet et Michel Gilot, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. 2, 1994, p. 267).

7) Angélique : Il n'y a plus que ma mère qui m'inquiète, cette mère qui m'idolâtre, qui ne m'a jamais fait sentir que son amour, qui ne veut jamais que ce que je veux.

Lisette : Bon, c'est que vous ne voulez jamais que ce qui lui plaît.

Angélique : Mais si elle fait si bien, que ce qui lui plaît me plaise aussi, n'est-ce pas comme si je faisais toujours mes volontés ?

Lisette : Est-ce que vous tremblez déjà ?

Angélique : Non, tu m'encourages, mais c'est ce misérable bien que j'ai, et qui me nuira : ah! que je suis fâchée d'être si riche

(*Ibid.*, p. 259).

8) Monsieur Orgon : [...]tiens, ma chère enfant, tu sais combien je t'aime. Dorante vient pour t'épouser ; dans le dernier voyage que je fis en province, j'arrêtai ce mariage-là avec son père, qui est mon intime et mon ancien ami, mais ce fut à condition que vous vous plairiez à tous deux, et que vous auriez entière liberté de vous expliquer là-dessus ; je te défends toute complaisance à mon égard : si Dorante ne te convient point, tu n'as qu'à le dire, et il repart [...] (*Théâtre complet*, éd. Henri Coulet et Michel Gilot, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. 1, 1993, p. 615).

9) Silvia : Je suis pénétrée de vos bontés, mon père, vous me défendez toute complaisance, et je vous obéirai.

Monsieur Orgon : Je te l'ordonne

(*Ibid.*, p. 615).

1 0) Madame Argante : Non, mais pour m'en rendre encore plus sûre, il faut que tu m'accordes une grâce.

Angélique : Une grâce ma mère, voilà un mot qui ne me convient point, ordonnez, et je vous obéirai.

Madame Argante : Oh si tu le prends sur ce ton-là, tu ne m'aimes pas tant que je croyais, je n'ai point d'ordre à vous donner ma fille, je suis votre amie, et vous êtes la mienne, et si vous me traitez autrement, je n'ai plus rien à vous dire

(*Théâtre complet*, éd. Henri Coulet et Michel Gilot, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. 2, 1994, p. 267).

1 1) Madame Argante : [...] parle-moi à cœur ouvert ; fais-moi ta confidente.

Angélique : Vous, la confidente de votre fille ?

Madame Argante : Oh ! votre fille ; eh ! qui te parle d'elle ? ce n'est point ta mère qui veut être ta confidente, c'est ton amie, encore une fois.

Angélique *riant* : D'accord, mais mon amie redira tout à ma mère, l'un est inséparable de l'autre

(*Ibid.*, p. 268).

1 2) « confidente » の概念を利用したアルガンツ夫人の「戦略」については、アニー・リヴァラやオリヴィエ・フルヌーもそれぞれ前掲の論考の中で考察している。前者は *mère* と *confidente* という矛盾する組み合わせへの操作のヴァリエーションに着目し、後者は交渉の言語学的モデルにおける「役に入ること」の機能に着目している。

1 3) Angélique : [...] puisque j'aime.

Madame Argante *d'un air sérieux* : Vous aimez ?...

Angélique, *riant* : Eh bien, ne voilà-t-il pas cette mère qui est absente, c'est pourtant elle qui me répond, mais rassurez-vous, car je badine.

Madame Argante : Non, tu ne badines point, tu me dis la vérité, et il n'y a rien là qui me surprenne, de mon côté je n'ai répondu sérieusement que parce que tu me parlais de même,

ainsi point d'inquiétude ; tu me confies donc que tu aimes.

Angélique : Je suis presque tentée de m'en dédire
(*Théâtre complet*, éd. Henri Coulet et Michel Gilot, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. 2, 1994, p. 268).

1 4) Madame Argante, *riant* : [...] conte-moi donc cette histoire-là, je la trouve plus plaisante que sérieuse, ce ne peut être qu'une aventure de campagne, une rencontre.

Angélique : Justement.

Madame Argante : Quelque jeune homme galant, qui t'a salué, et qui a su adroitement engager une conversation.

Angélique : C'est cela même.

Madame Argante : Sa hardiesse m'étonne, car tu es d'une figure qui devait lui en imposer : ne trouves-tu pas qu'il a un peu manqué de respect ?

(*Ibid.*, p. 269-270)

1 5) マリヴォーにおける「流行の恋愛」については前掲の拙論「マリヴォー『改心した伊達男』におけるジャンルの混交」でも考察した。

1 6) Angélique : Non, le hasard a tout fait, et c'est Lisette qui en est cause, quoique fort innocemment : elle tenait un livre, elle le laissa tomber, il le ramassa, et on se parla, cela est tout naturel

(*Théâtre complet*, éd. Henri Coulet et Michel Gilot, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. 2, 1994, p. 270).

1 7) Lisette : Allons, Madame, il faut que vous épousiez cet homme-là, le ciel vous destine l'un à l'autre, cela est visible, rappelez-vous votre aventure : nous nous promenons toutes deux dans les allées de ce bois, il y a mille autres endroits pour se promener, point du tout, cet homme qui nous est inconnu, ne vient qu'à celui-ci, parce qu'il faut qu'il nous rencontre, qu'y faisiez-vous ? vous lisiez, qu'y faisait-il ? il lisait, y a-t-il rien de plus marqué ?

(*Ibid.*, p. 259)

1 8) Madame Argante, *riant* : Va, ma chère enfant, tu es folle d'imaginer que tu aimes cet homme-là, c'est Lisette qui le fait accroire, tu es si fort au-dessus de pareille chose, tu en riras toi-même au premier jour.

Angélique : Non, je n'en crois rien, je ne m'y attends pas en vérité.

Madame Argante : Bagatelle, te dis-je, c'est qu'il y a là-dedans un air de roman qui te gagne.

Angélique : Moi, je n'en lis jamais, et puis notre aventure est toute des plus simples
(*Ibid.*, p. 270).

1 9) Madame Argante : Hélas ! ma fille, vois ce que tu as fait, te serais-tu crue capable de tromper ta mère, de voir à son insu un jeune étourdi, de courir les risques de son indiscretion, et de sa vanité, de t'exposer à tout ce qu'il voudra dire, et de te livrer à l'indécence de tant d'entrevues secrètes, ménagées par une misérable suivante sans cœur, qui ne s'embarrasse

guère des conséquences, pourvu qu'elle y trouve son intérêt, comme elle l'y trouve sans doute : Qui t'aurait dit il y a un mois que tu t'égarerais jusque-là, l'aurais-tu cru ?

Angélique *triste* : Je pourrais bien avoir tort, voilà des réflexions que je n'ai jamais faites (*Ibid.* p. 270-271).

2 0) Madame Argante : Eh ! ma chère enfant, qui est-ce qui te les ferait faire ? ce n'est pas un domestique payé pour te trahir, non plus qu'un amant qui met tout son bonheur à te séduire ; tu ne consultes que tes ennemis ; ton cœur même est de leur parti, tu n'as pour tout secours que ta vertu qui ne doit pas être contente, et qu'une véritable amie comme moi, dont tu te défies, que ne risques-tu pas ?

(*Ibid.* p. 271)

2 1) Angélique : Ah ! ma chère mère, ma chère amie, vous avez raison, vous m'ouvrez les yeux, vous me couvrez de confusion ; Lisette m'a trahie, et je romps avec le jeune homme ; que je vous suis obligée de vos conseils !

(*Ibid.* p. 271)

2 2) Angélique : Si Monsieur, comme je l'ai déjà dit, et à l'exemple de presque tous les jeunes gens, était homme à faire trophée d'une aventure dont je suis tout à fait innocente, où en serais-je ?

[...]

Angélique : Si de votre côté, vous êtes de ces filles intéressées qui ne se soucient pas de faire tort à leurs maîtresses, pourvu qu'elles y trouvent leur avantage, que ne risquerais-je pas ?

(*Ibid.* p.276)

2 3) Angélique *un moment sans parler, et à part* : J'ai été trop vite, ma mère, avec toute son expérience en a mal jugé, Dorante est un honnête homme.

(*Ibid.* p.277)

2 4) Dorante : Ne vous défiez donc jamais d'un cœur qui vous adore.

Angélique : Oui, Dorante, je vous le promets, voilà qui est fini, excusez tous deux l'embarras où se trouve une fille de mon âge, timide et vertueuse ; il y a tant de pièges dans la vie, j'ai si peu d'expérience, serait-il difficile de me tromper si on voulait. Je n'ai que ma sagesse et mon innocence pour toute ressource, et quand on a que cela on peut avoir peur [...]

(*Ibid.* p. 279).

2 5) Angélique : [...] c'est que vous allez le mépriser vous-même, il est perdu, vous n'étiez déjà que trop prévenue contre lui, et cependant il n'est point si méprisable, permettez que je le justifie, je suis peut-être prévenue moi-même ; [...] : vous croyez que c'est un jeune homme sans caractère, qui a plus de vanité que d'amour, qui ne cherche qu'à me séduire, et ce n'est point cela [...]

(*Ibid.* p.286-287).

2 6) Angélique : Vous le dirai-je, je me repens d'avoir tout dit, mon amour m'est cher, je

viens de m'ôter la liberté d'y céder, et peu s'en faut que je ne la regrette, je suis même fâchée d'être éclairée, je ne voyais rien de tout ce qui m'effraye, et me voilà plus triste que je ne l'étais (*Ibid.* p. 288).

27) Angélique : Ne me quittez point, secourez-moi, je ne me reconnais plus.

Madame Argante : Te secourir, et contre qui ma chère fille.

Angélique : Hélas ! contre moi, contre Dorante, et contre vous, qui nous séparerez peut-être.

[...]

(*Ibid.* p. 296).